

ガネーシャ大学との交流と協定の調印式

加 藤 房 江
(こども学科 准教授)

5日目はデンパサールにあるガネーシャ大学を訪問した。案内された講堂のステージには横断幕が掲げてあり、そこには、「CULTURAL EXCHANGE AND SIGN OF AGREEMENT BETWEEN SAITAMA JUNSHIN COLLEGE, JAPAN UNIVERSITAS PENDIDIKAN GANESHA, INDONESIA」の文字が書かれていた。熱烈な大歓迎ぶりが伝わった。そして、今回はガネーシャ大学との交流と協定の調印式が行われ、両校の交流が深められた。



ガネーシャ大学の先生方や学生達は、笑顔で出てきてくれた。今回2度目となる本学を熱烈歓迎してくれる様子に、驚きと共に大変嬉しい気持ちであった。先生方一人ひとりと握手を交わした。ステージでは、バリダンス衣装を身につけた3人の女性がスタンバイしていた。でもよく見ると小さくて可愛いらしい様子から、大人でなくて子どものダンサーだと気づいた。話を伺うとガネーシャ大学附属幼稚園の園児による伝統的なバリダンス・ベデットの舞の披露であることが分かった。園児の可愛らしいパフォーマンスに思わず「可愛いね」の言葉が学生達からも聞こえた。その後、国歌斉唱を行うということなので、急遽、君が代をダウンロードし、準備する場面などもあり、インドネシア国家斉唱を聞いた後、本学教員の指揮のもと「君が代」の斉唱を行った。

ガネーシャ大学の理事長による挨拶の通訳は、昨年私達が、バリ島幼児教育研修に参加した際、通訳してくれたサラスワティー大学日本語学科のラダさんが行ってくれた。ガネーシャ大学の学生に向けた内容も含まれたお話に、ラダさんがコンパクトに重要な部分を通訳してくれ、両大学が良い関係になれるようにとのことであった。本学学長からも、分かりやすいことばで、熱烈な大歓迎に対する感謝と両大学の友好が深まるようお話があった。そして今回のバリ島幼児教育研修で重要であるガネーシャ大学と埼玉純真短期大学との協定の調印式が行われた。両大学の友好のムードが漂い、調印式の直後は、ガネーシャ大学の先生方やガネーシャ大学附属幼稚園の園児、そして、本学教員と学生で、笑顔で記念撮影をした。



その後、ガネーシャ大学附属幼稚園の先生によるチェンドラワシー（Cendrawasih）という舞が披露された。チェンドラワシーとは、極楽鳥の名前であり、黄金の衣装に身を包んだダンサーが極楽鳥の求婚の様子を表現している。本来ならば、結婚式のための舞であるが、今回は大学と大学の協定が、結婚することと同等の内容であることから、この舞を踊る経緯となり、協定の調印式＝結婚式ということの歓迎の舞の披露である。

次にガネーシャ大学こども学科の学生さん達による演劇カナスが演じられた。優しくて頭の良い「にんにく」が、意地悪な「赤玉ねぎ」にいじめられるが、仕舞には、「にんにく」の人間性の良さが

引き立ち、「赤玉ねぎ」の意地悪さが戒められる内容で、日本の昔話を思わせるような分かりやすいストーリーを熱演していただいた。



ガネーシャ大学の歓迎の舞踊・演劇の後、本学でも準備を進めてきた日本舞踊「さくらさくら」と手話の振り付けで「小さな世界」を披露した。ガネーシャ大学の広めのステージでの、日本舞踊「さくらさくら」では、浴衣姿で、桜の花を使った舞から、扇子を使った舞へとアレンジしてのパフォーマンスだった。「小さな世界」では、日本とインドネシアの友好の気持ちが少しでも伝わるよう手話のジェスチャーで気持ちを伝えたいとの思いで歌った。

私たちのパフォーマンスが終了した後、桜の花や扇子をガネーシャ大学先生方へプレゼントをしたが、桜を一目見たいと思っているインドネシアの方も多いと聞いているので、とても喜んでもらった。

一通りセレモニーが終わった後は、ガネーシャ大学先生方と本学教員と協定後の具体的な内容が別室で話し合われた。

話し合いの間、本学学生とガネーシャ大学の学生とで、コミュニケーションが図れるようコーディネートしてくださるサラスワティー大学の学生とガネーシャ大学の学生会にセッティングをお願いし、

本学学生6人が分かれて、6グループで交流が出来るようにした。3月の季節にふさわしい日本のお雛様の折り紙をガネーシャ大学の学生達に伝えることを予定していたが、時間の都合により、本学の学生自身が得意としている折り紙をガネーシャ大学の学生に教えるようにした。予定とは異なる展開でも本学学生達は、柔軟に対応し、自分の得意とする折り紙を丁寧に楽しそうに伝えている姿が見られた。1テーブルには、本学学生1人に対して、ガネーシャ大学の学生が7・8人参加する形で交流が行われた。それぞれのテーブルで、ハート、飛行機、風船、鶴などを折り紙で折るガネーシャ大学の学生真剣な様子や時々笑い声も聞こえ、本学学生もいきいきと日本の文化を伝える姿が見られ、とても良い交流の時間が持てたと感じた。



ガネーシャ大学での協定の調印式や交流が無事に終了し、「Terima kasih」の言葉と共にガネーシャ大学を後にした。

通訳してくれたスティーバ大学の学生が、交流に必要なサポートしてくれたことと、ガネーシャ大学の学生会の方の丁寧な対応に感謝したい。